

松本市文化財調査報告No.97

SANZAI

松本市三才遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1992・3

松本市教育委員会

序

松本市瓦摩一帯はこれまで神田、源池小学校、松本工業高校など、本格的な発掘調査が及んだのは数カ所にとどまっております。

この度の区画整理事業に当地が含まれていたことから、松本市が三才土地区画整理組合から委託を受け、松本市教育委員会が調査を行うことになりました。今調査は工事に先立つ緊急発掘調査で、記録保存を目的としたものです。調査は平成3年11月から平成4年1月にかけて実施されました。ここで得られた成果は今後、地域の歴史を考えて行く上で役立つことと思います。

今調査には地元三才の皆様をはじめ多くの方々にご協力頂きました。記して感謝申し上げます。また冬の寒さが厳しくなる時期に調査に参加していただいた皆様にも併せて御礼申し上げます。今回の調査は大きな成果を挙げ得るまでには至りませんでした。本書が今後の調査の一助となれば幸いです。

平成4年3月

松本市教育委員会

教育長 松村好雄

例言

- 1 本書は平成3年11月5日から平成4年1月20日にかけて行われた、松本市大字三才さんざいに所在する三才遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は松本市が松本市三才土地区画整理組合より委託を受け、松本市教育委員会が調査を行ったものである。
- 3 本書の執筆は今村 克が行った。
- 4 本書作成に関わる作業は次の方々のご協力を得た。
トレース 開崎八重子、伊丹早苗
遺構図整理 石合英子
- 5 遺物の写真撮影は宮崎洋一氏による。
- 6 本書作成に当たり、次の方々より御協力頂いた。
三才土地区画整理組合、中島経夫、住田 正、太田守夫、各氏より多大な御教示を頂いた。
- 7 本調査に関する出土遺物及び図類等は、松本市教育委員会が保管している。

目次

I 調査地の位置と地形	1	IV 遺構	5
II 周辺遺跡	1	V 遺物	9
III 調査の概要	1	VI まとめ	9

I 調査地の位置と地形

本調査地は松本市大字三才にある若宮八幡社南に隣接する場所にある。当地は北方を流れる薄川によって形成された扇状地の扇脚にあたり、東麓を林城山、千鹿頭山、西麓を田川が形成した自然堤防によって囲まれている。このため上流域から流れた水はこの周辺に滞水し湿地を作ったと考えられる。このことは特にB地区の土層観察で明らかで、現地表下1.0mから2.0mにかけて厚く腐植土が堆積しているのが確認できた。A地区の土層観察では腐植土の厚い堆積は見られず、こぶし大～人頭大の礫が堆積していることから、薄川の押し出しがこの辺まで及んでいると思われる。明治中頃の松本市地図によれば、この薄川の押し出しと考えられる標高地上に集落と桑畑が営まれており、周辺の低湿地に水田が作られている。16、17世紀の三才地区のどこに集落域と生産域を考えるべきか、一つの参考資料になるのではなからうか。

II 周辺遺跡

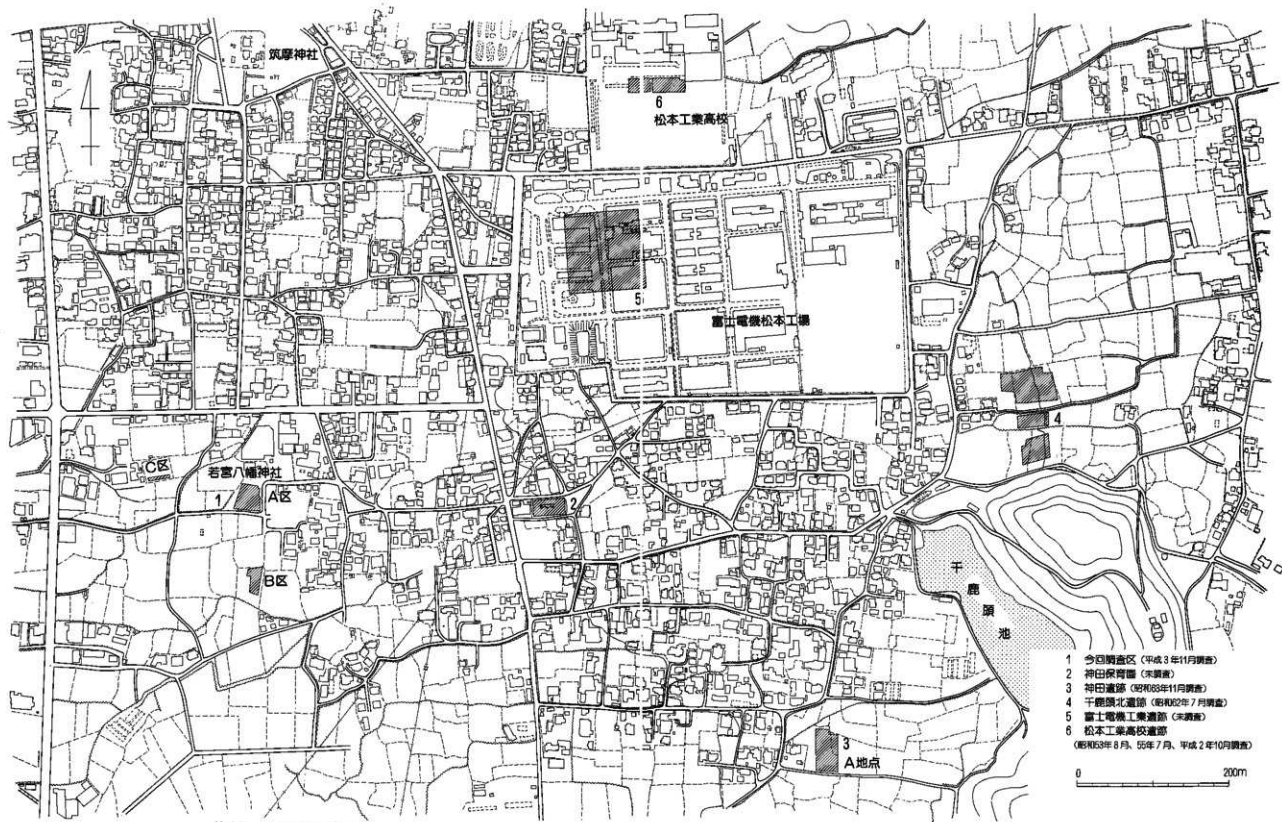
今回調査区の周辺、特に薄川左岸にある遺跡を第1図に掲げた。1は今回調査区。2は神田保育園敷地で弥生時代、平安時代の土器等が出土している。ただし遺跡の全貌は明らかでない。3は神田遺跡（昭和63年11月～平成元年1月発掘調査）で奈良時代後半～平安時代中頃の住居址10軒が発掘されている。4は千鹿頭北遺跡（昭和62年6月～8月発掘調査）で古墳時代前期～平安時代後半の住居址66軒が発掘されている。5は富士電機工業遺跡で正式な発掘調査は及んでいないが、工場敷地内から弥生時代～平安時代の土器が出土している。6は松本工業高校遺跡（昭和53年8月、昭和55年7月、平成2年10月発掘調査）で平安時代の土器が出土している。詳細は巻末に掲載した参考文献を見られたい。（但し、神田遺跡と松本工業高校遺跡調査区の一部は図1に未掲載）

III 調査の概要

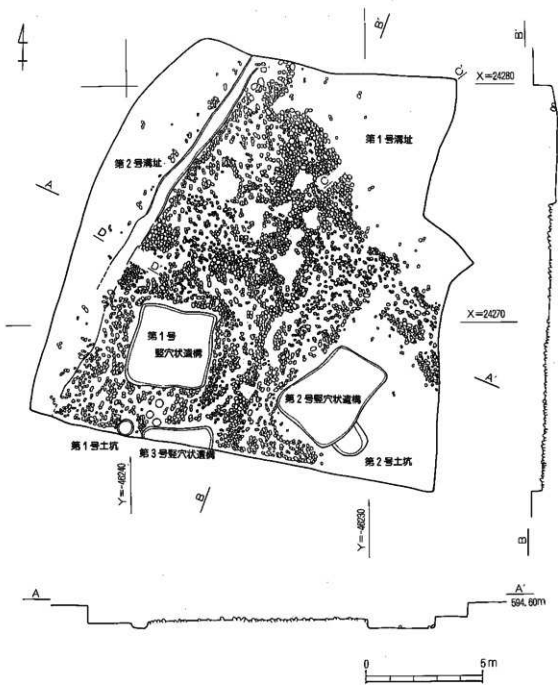
三才遺跡は奈良時代～平安時代の土器は採取されてはいたが、正式な発掘調査は行われておらず、遺跡の全体像はつかめていなかった。しかし近接する遺跡からは縄文時代～平安時代の土器が出土しており、当遺跡も該期の遺構等の検出が期待された。

調査は対象地が北東から南西へゆるく傾斜していること、湧水地であることなどを考慮して標高の高い北東麓に調査地点を設けた。A区はトレンチ調査の後、重機による表土剥ぎを行い、以下人力による調査を行った。成果は遺構…堅穴状遺構3、土坑2、ピット3、溝址2、遺物…内耳鍋、近世初頭の陶磁器等が得られた。B区はA区と同様の調査経過を経たが、遺構、遺物の検出は無かった。C地区では重機によるトレンチ調査を行い、薄川の氾濫の痕跡と厚く堆積した黒褐色の腐植土層を確認したにとどまった。測量基準点はX=24270、Y=-48230を使用した。

今回の調査からは出土した遺構等が近世初頭（16C後半～17C前半）に位置付けられるが、当時の集落の存在まで敷衍することはできない。標高のさらに高い現在の住宅域にその可能性が求められるかもしれない。今後の調査に期待したい。



第1図 周辺遺跡及び調査区



第2图 A区道槽配置图

IV 遺構

第1号竪穴状遺構……本址は調査A区南側で検出された。礫中に暗褐色土の広がりとして確認できた。規模は一辺3.3mの方形を呈する。壁高は東壁25cm、西壁20cm、南壁24cm、北壁20cmを測る。底面は礫混じり灰褐色砂質土である。焼土は検出されなかった。遺物は内耳鍋片数点、漆器1点が出土した。出土した土器は小片が多い。本址の帰属時期は16C以降としたい。

第2号竪穴状遺構……本址は調査A区南側で検出された。2号土坑を切る。規模は東西2.8m、南北4.1mの長方形を呈する。壁高は東壁16cm、西壁10cm、南壁16cm、北壁8cmを測る。底面はほぼ平坦で特に堅緻な部分は認められない。全面を掘り下げる途中で、中央部西側に炭化物が1.7m四方の範囲に不整形の高まりとして検出された。断面を観察するため半割したが、明らかに炭化材と判別できるようなものは出土せず、細かい炭化物の集積であった。このため炭化物の集積過程、原因を推定する資料は得られなかった。遺物は内耳鍋の小片が数点出土した。本址の帰属時期は16C以降としたい。

第3号竪穴状遺構……本址は調査A区南端で一部が検出された。本址の大半は調査区域外にのびると思われるため全体の規模は不明である。壁高は北壁で18cmを測る。遺物は内耳鍋の小片が出土している。本址の帰属時期は不明としたい。

第1号土坑……本址は調査A区南端で検出された。規模は70cm×70cmのほぼ円形で壁はゆるやかに立ち上がる。覆土中に5cm程の礫を多く含む。遺物は内耳鍋の小片が出土した。

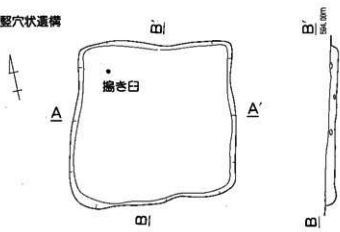
第2号土坑……本址は調査A区南側で検出された。第2号竪穴状遺構に切られる。規模は160cm×115cmの楕円形である。第2号竪穴状遺構の床面の下に人頭大の礫が集中して検出された。検出土状況を図化した後、礫を取り除いたところ、長さ90cm、巾18cmの木材と炭化物が現れた。炭化物の中からシナノガキ(D. Japonica Sieb. et Zucc.)の種子が検出された(註1)。木材は板状であるが人為的に加工されたものかどうか不明である。樹種の鑑定は行っていない。

(註1) 種子の同定は森義直氏にお願いした。

第1号溝址……本址は調査A区北側で検出された。土層観察及び断面形状などから、自然流路ないし、池状に水が溜ったものと考えたい。

第2号溝址……本址は調査A区西側を北から南へ流れる。巾は平均50cm、深さは平均20cmを測る。底は比較的平らで両壁とも直線的に立ち上がる。断面形状などから人為的な溝と判断した。遺物は内耳鍋小片が30数点出土した。本址の帰属時期は16Cとしたい。

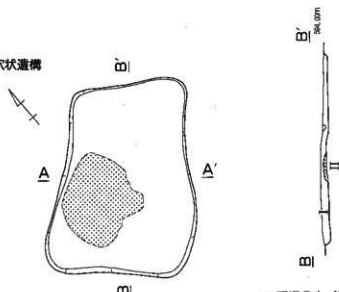
第1号竪穴状遺構



暗灰褐色土 (φ 3 cm ~ 拳大の礫混入)



第2号竪穴状遺構



炭化物

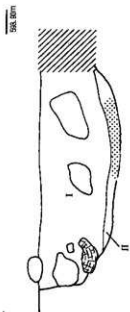
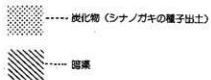
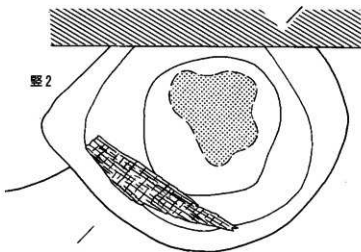
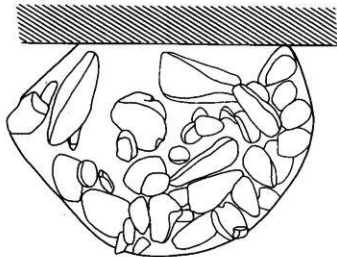
I : 灰褐色土 (粒子が細かい、砂質)

II : 炭化物



第3図 第1・2号竪穴状遺構

第2号土坑

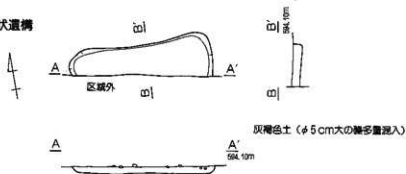


I : 灰褐色土 (炭化物混入)
 II : 黒褐色土 (炭化物多量混入)

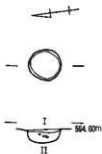


第4図 第2号土坑

第3号竪穴状遺構

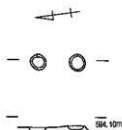


第1号土坑



- I : 褐色土 (鉄分多量に沈殿)
II : 灰褐色土 (φ5cm大の雑多量混入)

ビット1. 3



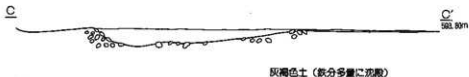
褐色土 (粒子が細かい)

ビット2

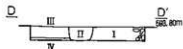


褐色土 (粒子が細かい)

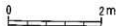
第1号溝址



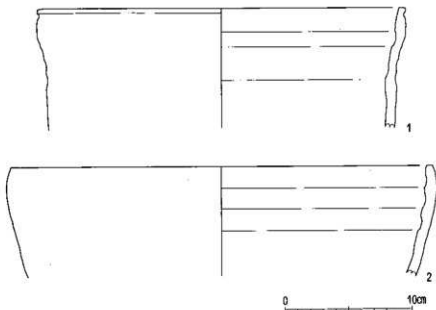
第2号溝址



- I : 灰色土
II : 第2号溝址 淡灰色土 (鉄分沈殿多い)
III : 淡灰色土
IV : 細灰色土



第5図 第3号竪穴状遺構・土坑・ビット・溝



第6図 出土土器

V 遺物

遺物はA区南側と第2号溝址から主に出土している。内容は緑釉陶器、内耳鍋、土師器皿、瀬戸・美濃系陶器、青磁椀、遠き臼がある。出土量は内耳鍋が圧倒的に多い。時期は内耳鍋が16世紀、瀬戸・美濃系陶器、青磁椀が16世紀後半～17世紀前半に位置付けられる。紙敷の関係から図化した遺物の中から内耳鍋2点を図6に掲げた。1は口辺部内面に凹状の調整痕を1周明瞭に残す。2は同じく調整痕を3周残す。その他第4図版-9の揚き臼は口辺部の面取りを特徴としており鏝鉢の可能性を残す。

VI まとめ

三才という地名が文献に載るのは「諏方上下社祭祀再興次第」（16世紀中頃の文献）に「巻貫七百文 三才」とあるのが初出と聞く（註2）。また「信濃国絵図高辻」（17世紀中頃の文献）には「一高百拾石余 三才村」が見える。その他「信濃国郷帳」（江戸時代末の文献）にも筑摩郡の項に「一高百拾石七斗七升 三才村」の記載がある。文献に見えるかぎり近世初頭から小村ではあるが連続と続く歴史があったことが推定される。今回の調査結果がこの三才村の歴史に直接結びつくものではないが、資料的には16世紀～17世紀初頭にこの周辺に暮らした人々の痕跡が得られた。今後の調査によって資料が増加することを期待したい。最後に三才土地区画整理組合の皆様、発掘調査に従事していただいた作業員の皆様に記して感謝申し上げます。

（註2）三才地区の中世、近世文献に關し中島經夫氏に御教示いただいた。

参考文献

- （財）長野県運蔵文化財センター 1990 中央道長野線発掘調査報告書総論編
 信濃資料刊行会 1971 信濃資料叢書 3巻
 1975 信濃資料叢書 11巻
 朝日新聞社 1978 朝日百科 世界の植物
 松本市教育委員会 1989 松本市文化財調査報告 69 松本市千鳥頭北遺跡
 1989 松本市文化財調査報告 73 松本市神田遺跡
 1979 長野県立松本工業高等学校遺跡
 1981 //



調査A区（東より）



調査B区（南より）



重機による作業



調査風景



第1号竪穴状遺構



第2号竪穴状遺構

第1図版 調査地・作業風景・遺構



第2号土坑窯出土



同炭化物・木材出土



第1号溝址（北より）



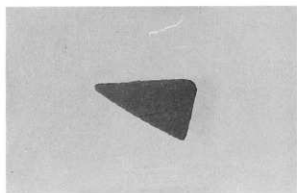
同（東より）



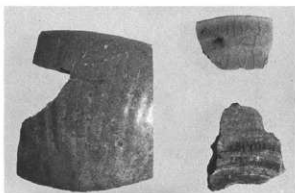
第2号溝址（北より）



調査A区（東より）

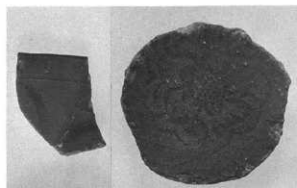


1



2

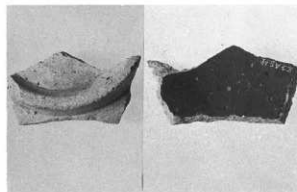
3



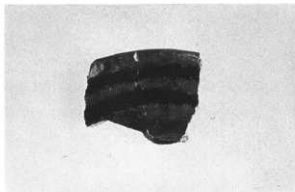
4



5



6



7

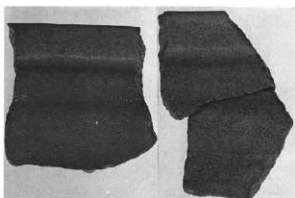
1. 緑釉碗
2. 3. 灰釉丸碗・灰釉皿
4. 青磁碗 (龟泉窯系)

5. 志野菊皿 (瀬戸・美濃系)
6. 天目茶碗 (瀬戸・美濃系)
7. 丸皿 (瀬戸・美濃系)

第3図版 出土陶磁器

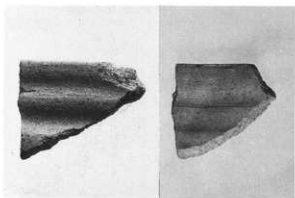


1



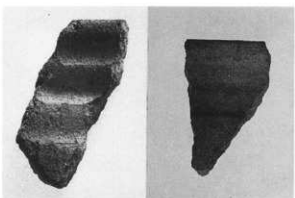
2

3



4

5



6

7



8



9

1. 内耳鍋(口辺部凹状調整痕3周)
 2. 3. 内耳鍋(口辺部凹状調整痕1周)
 4. 5. 内耳鍋(口辺部凹状調整痕2周)

6. 7. 内耳鍋(口辺部凹状調整痕3周)
 8. 壺き臼(凝灰岩)
 9. 壺き臼(安山岩)

第4図版 出土土器・石器

松本市文化財調査報告 No.07

松本市三才遺跡

平成4年3月20日 印刷

平成4年3月30日 発行

編集 松本市教育委員会

〒390 長野県松本市丸の内3-7

TEL. 0263(34)3000

発行 松本市教育委員会

印刷 藤原印刷株式会社
